

「東京新聞」の3月掲載の「平和の俳句」から。3月はエッセイストの岸本葉子氏が選者に加わっている。沖縄に関する句から。「沖縄をどうするつもり虎落笛（もがりぶえ）津田正義（77歳）<金子兜太 沖縄の人々のご苦労は、今次大戦の終了のあとも続いている。茨城県鹿嶋市の作者にも深く浮かんでやまないのだ。虎落笛が切ない。> 虎落笛は「冬の激しい風が竹垣や柵（さく）などに吹きつけて発する笛のような音」だそうである。沖縄に吹き付ける激しい風は呻く悲鳴のような笛の音ではないか。「沖縄や子宮の痛み抱くごとく 稲塚（いなづか）君代（70歳）<いとうせいこう 自らのこととして受け止め、それどころか最も大切な生命の起源の場所を感じる。それは薄っぺらな同情などではないつながりだ。> 沖縄の苦悩を子宮の痛みと捉えている。女性ならではの句であろう。子宮は命を生み出す臓器である。「腸が千切れる」という腸の中に「子宮」も含まれている。

沖縄平和運動センターの山城博治氏は辺野古新基地、高江ヘリパッド建設反対運動の力スマ的なリーダーである。彼は公務執行妨害と傷害などの罪で、今まで幾度も逮捕されてきた。2016年11月29日、工事資材搬入を阻止した威力業務妨害罪で再逮捕された。政府は、彼を拘束して、反対運動を抑え込もうとした。人権侵害として、釈放を求めていたが、今年の3月18日、5ヶ月に渡る拘束からようやく釈放された。反対運動をしてきた人々は、彼の拘束が更に力強い結束を生み出したと言っていた。

関内で行われた山城氏の講演を聞きに行った。沖縄は厳しい状況にあるが、諦めずに勝利するまで闘うと力強い講演をされた。講演後、出口で、握手を交わした。初めての対面であったが、私の顔を見て「お久しぶりです」と言われた。私の顔は沖縄でよく見かけるような顔なのと思った。沖縄は米国の植民地のようで、日本政府は、それを容認している。本土の人々は二人の句のように、自分の問題として捉えることが求められている。

「平和とはうそのない文字信じます 右田（みぎた）守幸（100歳）」ブラジル・サンパウロ市 <金子兜太 年齢百歳（百寿）の右田氏にとって「うそのない文字を信じます」のひと言がじつに切実にひびく。平和は真実にあり。> ブラジル・サンパウロ市の100歳の右田氏からの句である。右田氏はブラジルでどんな生活をしてきたのであろうか。移民として苦労をされたのであろう。政治家、役人たちの「ウソ」がまかり通っている。ウソのない、真実が平和を作っていく。文字、言葉が信じられる社会であってほしい。

「戦病死ほんとは餓死だ僕の父 澤田洋（74歳）」<岸本葉子 悔しいなどの形容がないことがかえって率直に胸を打つ。> <金子兜太 太平洋戦線での餓死者は百数十万ともいわれる。知らされず。> <いとうせいこう 英雄とたてまつるならば真実を知らねばならない。合掌。> 日本兵たちは武器や食料の兵站を断たれ、3分の1が戦わず餓死したと言われている。日本は無謀な戦争をしたのである。餓死は苦しい死に方らしい。逃亡者の身代わりになったコルベ神父は餓死を強いられた。あまりに苦しむ姿を見て、ドイツ兵は注射で毒殺したという。苦しんで死んだ兵隊たちの望みは「平和」だけである。

「白梅（しらうめ）や学問を捨て捧（ささ）げしか 伊藤斎（ひとし）（76歳）」<岸本葉子 学ぶ意欲に富み、未来に富んでいたはずの若者の多くが、学徒出陣により兵となり命を失った。白梅の高潔さ、香り高さが胸に迫る。> 戦争で夭折した画家たちが描いた「無言館」に飾られた絵画と言葉、そして、館の静寂を思い起こす。戦争は莫大な浪費である。人材の損失は測りがたく大きい。愚かな戦争は絶対に起こしてはならない。